

【晉紀十八】起著雍淹茂，盡重光赤奮若，凡四年。

■東晉、▲前燕、（続国訳漢文大成 經子史部 第 6 卷 6-085p）

かんこう

顯宗成皇帝中之下鹹康四年（戊戌，338年）

【後趙と燕の段遼包囲網】

後趙▲**〔石虎の段遼討伐、慕容皝は挾撃〕**春，正月，燕王の皝は都尉の趙檠を遣わして趙に如き，師の期を聽かしむ。趙王の虎は將に段遼を撃たんとし，驍勇の者三萬人を募り，悉く龍騰（咸康二年に石虎は直潁を改名）中郎に拜す。會々遼は段屈雲を遣わして趙の幽州を襲わしめ，幽州刺史の李孟は退きて易京（198 年公孫瓚と袁紹の最後の戦いの地）を保つ。虎は乃ち桃豹を以て横海將軍（石氏独自の將軍号）と為し，王華を渡遼將軍（遼東に渡るという意味か）と為し，舟師十萬を帥いて漂淪津（直隸省津海道鹽山県、現・滄州市鹽山県）に出でしむ。支雄を龍驤大將軍と為し，姚弋仲を冠軍將軍と為し，步騎七萬を帥いて前鋒と為し以て遼を伐たしむ。

▲**〔段蘭は慕容翰の諫言を聞かず敗北〕**三月，趙檠は還りて棘城（三国魏属昌黎郡昌黎县、朝陽市北票市）に至る。燕王の皝は兵を引いて令支（現・唐山市遷安市）以北の諸城を攻掠す。段遼は將に之を追わんとす。慕容翰は曰く、

「今趙兵は南に在り，當に力を並せて之を御ぐべし。而るに更に燕と鬥い，燕王は自ら將いて而して來たり，其の士卒は精銳にして，（6-086p）若し萬一に利を失えば，將に何を以て南の敵を御ぐ乎！」

段蘭は怒りて曰く、

「吾は前に卿の誤まる所と為り（前卷咸和八年にあり），以て今日之患いを成す，吾は復た卿の計中に墮ちず矣！」

乃ち悉く見衆を將いて之を追う。皝は伏を設けて以て之を待ち，大いに蘭の兵を破り，斬首は數千級，五千戸及び畜産萬計りを掠めて以て歸る。

後趙 **〔段遼は慕容翰に謝り、翰は宇文に奔る〕**趙王の虎は進みて金台（直隸省保定道易県、現・保定市易県）に屯す。支雄は長驅して薊に入り，段遼の署する所の漁陽、上谷、代郡の守相は皆な降り，四十餘城を取る。北平の相の陽裕は其の民數千家を帥いて燕山（直隸省津海道玉田県、現・唐山市玉田県）に登り以て自ら固め，諸將は其の後患と為るを恐れ，之を攻めんと欲す。虎は曰く、

「裕は儒生にして，名節を矜り惜しみ，迎え降るを恥じる耳，能く為す無き也。」

遂に之を過ぎ，徐無（北平郡の県、直隸省津海道遵化県、現・唐山市遵化県）に至る。段遼は弟の蘭が既に敗れるを以て，必（続は敢）ず復た戦わず，妻子、宗族、豪大（豪帥）千餘家を帥いて，令支を棄て，密雲山（京兆密雲県の山、現・北京直轄市密雲区）に奔る。將に行かんとし，慕容翰の手を執りて泣いて曰く、

「卿の言を用いず，自ら敗亡を取る。我は固より苦心（続は甘心）す，卿をして所を失わ令め，深く以て愧じと為す。」

翰は北に宇文氏に奔る。

後趙 **〔石虎は段国を撃破〕**遼の左右長史の劉群、盧謐、崔悅等（90 卷に令支の奔る記事）は府庫を封じて降を請う。虎は將軍の郭太、麻秋を遣わして輕騎二萬を帥いて遼を追ひ，密雲山に至る。其の母妻を獲り，斬首は三千級。遼は單騎にして險に走り，其の子の乞特真を遣わして表を奉じ及び名馬を趙に獻じ，虎は之を受ける。

後趙 **〔陽裕は石虎に許される〕** 虎は令支宮（段氏の都）に入り、論功封賞し各々差有り。段國の民二萬餘戸を司、雍、兗、豫の四州に徙す。士大夫之才行有るは、皆な之を擢敘す。陽裕は軍門に詣りて降る。虎は之を讓めて曰く、

「卿は昔奴虜のように走るを為し、今士人のように來るを為す、豈に天命は、將に逃匿するに地無しとするを識知する邪？」

對えて曰く、

「臣は昔王公（王浚をいう）に事え、匡濟する能わず。段氏に逃げ（89 卷愍帝建興二年にあり）、復た全くする能わず。今陛下は天網高く張り、四海を籠絡し、幽、冀の豪傑は風從せざるは莫し、如し臣比肩すれば、獨り愧じる所無し。生死之命は、惟だ陛下之を制すなり！」

虎は悦び、即ち北平の太守に拜す。

■▲夏，四月，癸丑（3日），慕容皝を以て征北大將軍、幽州牧と為し、平州刺史を領せしむ。

【蜀の李壽立ちて、漢を称する】

成漢 **〔成主の期は驕虐〕** 成主（国号は大成、後蜀、のち李壽が漢とするので「成漢」と呼ぶ）の期は驕虐日に甚しく、誅殺する所多く、而して其の資財、婦女を籍沒し、是に由りて大臣は多く自ら安ぜず。漢王の壽（涪城に居る）は素より貴重にして、威名有り、期及び建寧王の越等は皆な之を忌む。壽は免かれざるを懼れ、當に入朝する毎に、常に詐りて邊書を為^づり、辭するに警急を以てす。

成漢 **〔李壽は龔壯の進言で成都攻略決意〕** 初め、巴西の處士の龔壯は、父、叔は皆な李特の殺す所と為る。壯は仇を報いんと欲し、積年喪を除かず。（6-087p）壽は數々禮を以て之を辟す。壯は應じず、而るに往きて壽に見え、壽は密かに壯に問うに自ら安ずる之策を以てす。壯は曰く、

「巴、蜀之民は本は皆な晉の臣なり、節下（魏晉以來、節を持つ方面軍の長）は若し能く兵を發して西に成都を取り、晉に稱藩すれば、誰か争いて節下の為に臂を奮いて前驅せざる者あるや？此くの如くならば則ち福は子孫に流れ、名は不朽に垂れん、豈に徒に今日之禍いを脱する而して已むならんや！」

壽は之を然ると為し、陰かに長史の略陽の羅恆（晉書後蜀載記には羅桓に作る）と、巴西の解思明と與に成都を攻めんと謀る。

成漢 **〔李壽の成都制圧〕** 期は頗る之を聞き、數々許涪を遣わして壽の所に至り、其の動靜を伺わしむ。又た壽の養弟の安北將軍の叡を鳩殺（鳩毒で毒殺）す。壽は乃ち詐りて妹の夫の任調の書を為^づりて、「期は當に壽を取らんとす」

と雲う。其の衆は之を信じ、遂に歩騎萬餘人を帥いて涪より成都を襲い、賞するに城中の財物を以てするを許し、其の將の李奔を以て前鋒と為す。期は其の至るを意^{おも}わず、初め備えを設けず。壽の世子の勢は翊軍校尉^な為り、開門して之を納れ、遂に成都に克ち、兵を宮門に屯す。期は侍中を遣わして壽を勞わる。壽は、

「建寧王の越、景騫、田褒、姚華、許涪及び征西將軍の李遐、將軍の李西等は奸を懷き政を亂す」と奏し、皆な收めて之を殺す。兵を縦^{ほしいます}にして大いに掠し、數日にして乃ち定む。壽は矯りて太后の任氏の令を以て期を廢^{きよう}して邛都縣公と為し、之を別宮に幽す。追いて戻太子（咸和九年に期・越は主を殺し命名）に諡して哀皇帝と曰う。

成漢 **〔李壽は漢の皇帝に即位〕** 羅恆、解思明、李奔等は壽に鎮西將軍、益州牧、成都王と稱し、晉に稱藩し、邛都公を建康に送るを勸める。任調及び司馬の蔡興、侍中の李艷等は壽に自ら帝を稱するを勸める。

壽は命じて之を筮^{ぜい}せしめ、占者は曰く、
「數年にして天子となる可し。」

調は喜んで曰く、
「一日すら尚ほ足らん、況んや數年を乎！」

思明は曰く、
「數年の天子は、百世の諸侯と孰^{いずれ}與ぞや？」

壽は曰く、
「朝に道を聞けば、夕べに死すとも可なり矣。」（論語・孔子の言）

遂ち皇帝に即位し、國號を改めて漢と曰い、大赦し、改元して漢興とす。安車束帛を以て龔^{きん}壯を征して太師と為す。壯は誓つて仕えず、壽（字は武考）の贈遺する所は、一に受ける所無し。壽は改めて宗廟を立て、父の驤^{きん}を追尊して獻皇帝と曰い、母の咎氏^{さう}を皇太后と曰う。妃の閔氏^{きん}を立てて皇后と為し、世子の勢を皇太子と為す。更に舊廟を以て大成廟と為し、凡そ諸々の制度は、多く改易する所とす。董^{きん}校を以て相國と為し、羅恆を尚書令と為し、解思明を廣漢太守と為し、任調を鎮北將軍、梁州刺史と為し、李奔を西夷校尉と為し、從子の權を寧州刺史と為す。公、卿、州、郡は、悉く其の僚佐を用いて之に代える。成氏の舊臣、近親及び六郡の士人（李特と蜀に入る者）は、皆な疏斥せ見る。邛都公の期は歎いて曰く、
「天下の主が乃ち小縣公と為るは、死するに如かず！」

五月、縊りて而して卒す（李期の年は25）。壽は諡して幽公と曰い、葬するに王禮を以てす。（6-088p）

【石虎の攻撃を慕容皝はしのぐ】

後趙▲[趙は燕を攻めんとす] 趙王の虎は燕王の皝が趙兵が段遼を攻めるに會せず而して自ら其の利を専らにする（慕容皝は段氏の人民畜産を掠めて段氏の至る前に北に帰った）を以て、之を伐たんと欲す。太史令の趙攬は諫めて曰く、

「歲星は燕分を守る、師は必ず功無し。」（歲星の久しく居る所は、その國徳厚ありて五穀豐昌し伐つべからず）
虎は怒り、之を鞭つ。皝は之を聞き、兵を嚴にして備えを設ける。六卿（去年置いたばかり）、納言、常伯、冗騎常侍の官を罷める。趙の戎卒は數十萬ありて、燕人は震え恐れる。皝は内史の高詡に謂つて曰く、
「將に之を若何せん？」

對えて曰く、
「趙の兵は強しと雖も、然れども憂うるに足りず、但だ堅く守りて以て之を拒むべし、能く為す無からん也。」

後趙▲[燕の国内は動揺し趙に降る者相次ぐ] 虎は遣使して四出し、民夷を招誘せしめ、燕の成周（郡）内史の崔燾、居就令の游泓、武原令の常霸、東夷校尉の封抽、護軍の宋晃等は皆な之に應じ、凡そ三十六城を得る。泓は、遂之兄の子也。冀陽（郡）の流寓之士は共に太守の宋燭を殺し以て趙に降る。燭は、晃之從兄也。營丘（郡）内史の鮮于屈は亦た遣使して趙に降る。武寧令の廣平の孫興は吏民に曉諭し共に屈を收め、其の罪を數め而して之を殺し、城を閉じて拒み守る。朝鮮令の昌黎の孫泳は衆を帥いて趙を拒む。大姓王の清等は密かに趙に應じんと謀り、泳は收めて之を斬る。同謀の數百人は惶怖して罪を請い、泳は皆な之を釋し、與に同じく拒み守る。樂浪（燕の置く地で故地ではない、慕容廆の置く所、88 卷愍帝建興元年にあり）太守の鞠彭は境内が以て皆な叛し、郷里の壯士二百餘人を選んで共に棘城に還る。

後趙▲[慕容皝の逃亡を慕容根が諫止] ▲戊子（9日）、趙兵は進みて棘城に逼る。燕王の皝は出亡せん

と欲し、帳下の將の**慕輿根**は諫めて曰く、

「趙は強く我は弱し、**大王**が一たび足を舉(出亡する)げれば則ち趙之氣勢は遂に成らん。趙人をして(燕の)國民を收略せ使めれば、兵は強く穀は足り、復た敵す可からず。竊かに意(おも)うに趙人は正に**大王**の此くの如くならんと欲する耳、奈何ぞ其の計中に入らん乎？今固く堅城を守れば、其の勢いは百倍し、縦え其れ急に攻めるとも、猶ほ支持(続は枝持)するに足る、形を觀て變を察し、(趙兵の隙)間出して利を求めん。如し事之濟らざるも、走るを失わず、奈何して風を望みて委て去り、必亡之理を為さん乎！」

眭は乃ち止め、然るに猶ほ懼れは色に形(あら)われる。玄菟太守の河間の**劉佩**は曰く、

「今強寇は外に在り、衆心は恟懼す、事之安危は、一人に繋かる。**大王**は此の際推委する所無し(他の人には任せられない)、當に自ら強(つよ)めて以て將士を厲(はげ)ますべし、宜しく弱きを示す可からず。事は急なり矣、臣は請う出でて之を撃ちたん、縦(たと)い大いに捷つ無しとも、以て衆を安んじるに足りん。」

乃ち敢死の數百騎を將いて出でて趙兵を衝き、向かう所披(ひら)き靡(なび)き、斬獲し而して還り、是に於いて士氣は百倍す。**眭**は計を封奔に問い、對えて曰く、

「**石虎**の凶虐は已に甚しく、民神は共に疾み、禍敗之至るは、其の何れの日かこれ有らん！(今まさにその日来るべしの意)今國を空しくして遠く來たりて、攻守の勢いは異なり、戎馬は強きと雖も、(6-089p)患いと為す能わず。兵を頓(とど)めて日を積めば、罅隙(きんげき)は自ら生じ、但だ堅く守りて以て之を俟たん耳。」

眭の意は乃ち安ず。或は**眭**に降るを説き、**眭**は曰く、

「孤は方に天下を取らん、何ぞ降れと謂う也！」

後趙▲**〔石虎大敗の中、冉閔のみ一軍全くす〕**趙兵は四面から蟻のように附いて城に緣り、**慕輿根**等は晝夜力戦し、凡そ十餘日、趙兵は克つ能わず、壬辰(13日)、引いて退く。**眭**は其の子の**恪**を遣わして二千騎を帥いて之を追撃せしめ、趙兵は大いに敗れ、斬獲は三萬餘級なり。趙の諸軍は皆な甲を棄てて逃げ潰え、惟だ游撃將軍の**石閔**(冉閔初登場、のち冉魏の主)の一軍は獨り全くす。**閔**の父は**瞻**、内黄(魏郡の県、河南省河北道内黄県、現・安陽市内黄県)の人なり、本姓は**冉**、趙主の**勒**は陳午を破り、之を獲り、**虎**に命じて養いて以て子と為さしむ。**閔**は驍勇にして善く戦い、多く策略あり。**虎**は之を愛し、諸孫に比す。

後趙**〔石閔は蒲洪を除くを進言して果たさず〕****虎**は鄴に還り、**劉群**を以て中書令と為し、**盧謐**を中書侍郎と為す。**蒲洪**(前秦苻健の父)は功を以て使持節、都督六夷諸軍事、冠軍大將軍を拜し、西平郡公に封じる。**石閔**は**虎**に言つて曰く、

「**蒲洪**は雄俊にして、將士の死力を得て、諸子は皆な非常之才有り、且つ強兵五萬を握り、近畿(枋頭に鎮す)に屯據す。宜しく密かに之を除き、以て社稷を安んじるべし。」

虎は曰く、

「吾は方に其の父子に倚り以て吳、蜀を取らんとす、奈何して之を殺すや！」

之を待つこと愈々厚し。

▲**〔慕容眭は反乱諸城を伐つ〕**燕王の**眭**は兵を分けて諸々の叛城を討ち、皆な之を下す。境を拓きて凡城に至る。**崔熲**、**常霸**は鄴に奔り、封抽、**宋晃**、**游漲**は高句麗に奔る。**眭**は**鞠彭**、**慕輿根**等を賞して而して諸々の叛者を治め、誅滅すること甚だ衆し。功曹の**劉翔**は之が為に申理(理を治める)し、全活する所多し。

▲**〔李洪は慕容氏への忠篤で著名に〕**趙之棘城を攻める也、燕の右司の**李洪**之弟の**普**は以為らく棘城は必らず敗れんと。**洪**に出でて禍いを避けるを勧める。**洪**は曰く、

「天道は幽遠にして、人事は知り難し。且つ委任に當たる、輕々しく動きて悔いを取る勿かれ。」

普は固く請いて已まず、**洪**は曰く、

「卿の意見明審なる者、當に自ら之を行ふべし。吾は慕容氏の大恩を受け、義は去就無し、當に死を此に効す耳。」

普と流涕し而して訣す。普は遂に趙に降り、趙軍に従いて南に歸り、喪亂に死す。洪は是に由りて忠篤を以て名を著わす。

後趙 **〔石虎は高句麗・青州と燕の挾撃を謀る〕** 趙王の虎は渡遼將軍の曹伏を遣わして青州之衆を將いて海島を戍らしめ、穀三百萬斛を運んで以て之を給す。又た船三百艘を以て穀三十萬斛を運んで高句麗に詣り、典農中郎の將王典をして衆萬餘を帥いて海濱に屯田せ使む。又た青州に千艘を造船せ令め、以て燕を撃たんと謀る。

後趙 趙の太子の宣は步騎二萬を帥いて朔方の鮮卑の斛摩頭を撃ち、之を破り、斬首は四萬餘級。

後趙 **〔趙の蝗害〕** 冀州の八郡は大いに蝗あり、趙の司隸は守宰を坐せしめんと請い。趙王の虎は曰く、「此れ朕の失敗の致す所、而して咎を守宰に委ねんと欲するは、豈に己を罪する之意邪！司隸は讜言（教訓となる名言）を進め、朕が逮ばざるを佐けず、而して妄りに無辜（無実）を陷れんと欲すれば、白衣をもって職を領す可し（その品秩をしりぞけて庶民に落とし、なおかつ司隸の職を領すること）！」（6-090p）

後趙 **〔石廣の誅殺〕** 虎は襄城公の涉歸、上庸公の日歸をして衆を帥いて長安を戍ら使む。二歸（みな石虎の一族）は、

「鎮西將軍の石廣は私に恩澤を樹て、潜かに不軌を謀る」

と告げ、虎は廣を追いて鄴に至り、之を殺す。

■ **〔庾亮が王導を廃さんとするも、王導は齒牙にかけず〕** 乙未（16日）、司徒の導を以て太傅、都督中外諸軍事と為す。郗鑒を太尉と為し、庾亮を司空と為す。六月、尋を以て丞相と為し、司徒の官を罷め以て丞相府に并す。導の性は寛厚にして、諸將に委任す。趙胤、賈寧等は、多く法を奉らず、大臣は之を患える。庾亮は郗鑒に箋を與えて曰く、

「主上は八九歳より以て成人に及ぶまで、入りては則ち宮人之手に在り、出でては則ち唯だ武官、小人のみ、書を読むに従いて音句を受ける無し、顧問するに未だ嘗て君子に遇わず。秦の政（始皇帝）は其の黔首（一般民衆は何もかぶらず、黒い髪のまま、人民、庶民）を愚かにせんと欲する（焚書坑儒の事）すら、天下は猶ほ可からずを知る。況んや其の主を愚かにせんと欲する哉！人主は春秋に既に盛んなり、宜しく子明辟（天子親政）に復すべし。（而るに）稽首して政を歸さず、甫めて師傅之尊きに居り、多く無賴之士を養う。公は下官と並びて托付之重きを荷ない、大奸を掃わざれば、何を以て先帝に地下に見えん乎！」

共に兵を起こして導を廢せんと欲し、鑒は聽さず。南蠻校尉（武帝が襄陽に置く、後江陵に移す）の陶稱は、侃之子也、亮の謀を以て導に語る。或は導に密かに之が為に備えるを勧め、導は曰く、

「吾は元規（庾亮の字）と是れ休戚を同じくし、悠悠（たる道路の）之談（風説）は、宜しく智者之口に絶つべし（君子が言うべきでない）。則ち君の言の如く、元規が若し來たらば、吾は便ち角巾して第に還らん（引退）、復た何ぞ懼れん哉！」

又た稱に書を與えて、以て為す、

「庾公は帝之元舅にして、宜しく善く之に事えるべし！」

征西參軍の孫盛は密かに亮を諫めて曰く、

「王公は常に世外之懷い有り（王導は常に事を謝して人世の外に優游せんと欲する様子）、豈に肯て凡人の事を為さん

邪！此れ必ず佞邪之徒は内外を（離）間せんと欲する耳。」

亮は乃ち止む。盛は、楚（晉初めの名士）之孫也。是の時亮は外鎮に居ると雖も、而して遙かに朝廷之權を執り、既に上流に據り、強兵を擁し、趣勢者多く之に歸す。導は内には能く平らかならず、常て西風ふき塵起きるに遇い、扇を舉げて自ら蔽い、徐ろに曰く、

「元規の塵は人を汚す！」

導は江夏の李充を以て丞相掾と為す。充は時俗の浮虚を崇尚するを以て、乃ち《學箴》を著わす。以て為す、老子は云わく

「仁を絶ち義を棄てれば、民は孝慈に復す。」

豈に仁義之道絶えて、然る後に孝慈の乃ち生ずる哉？蓋し仁義を情とする者は寡く、而して仁義を利とする者は衆きを患い、將に責めを聖人に寄せて而して累を陳跡（既往の事績）に遣（晉書文苑伝には遣）わさんとする也。凡そ人は形を見る者は衆く、道に及ぶ者は鮮し、跡を逐うに逾々篤ければ、本を離れること逾々遠し。故に《學箴》を作り以て其の蔽を祛い、曰く、

「名之彰われる攸は、道之廢する攸なり。及ち隆んにすべき所を損し、乃ち替えるべき所を崇ぶ。仁に非ざれば以て物を長ずる無く、（6-091p）義に非ざれば以て恥を齊える無し、仁義は固より遠くする可からず、其の仁義を害する者を去り而して已む。」

【成漢の自立と晉称藩】

成漢漢の李奔の從兄の廣漢太守の乾は大臣に告げて廢立を謀らんとする。秋，七月，漢主の壽は其の子の廣をして大臣と前殿に盟わ使め、乾を徙して漢嘉太守と為す。李閔を以て荊州刺史と為し、巴郡に鎮ぜしむ。閔は、恭之子也。

成漢[成漢は晉に称藩すべしとの龔壯の意見]八月，蜀中は久しく雨ふり、百姓は饑え疫し、壽は群臣に命じて得失を極言せしむ。龔壯は封事を上り稱す、

「陛下は兵を起こす之初め、上は星辰を指し、昭らかに天地に告げ、血を翫りて衆に盟い、國を舉げて稱籙し、天は應じ人は悦び、大功は克く集まる。而るに論者は未だ論らず、權に宜しく制を稱す。今淫雨は百日にして、饑疫は並び臻り、天は其れ或い者將に以て陛下に監示するが故也。愚謂うに宜しく前盟に遵い、建康を推奉すべし。彼は必ず高爵重位を愛まず以て大功に報いん。階を降ること一等（皇帝から王に一等下がるの意味）と雖も、而して子孫は窮まり無く、永く福祚を保ち、亦た休まざる哉！論者は或は言うに二州（の人、梁州・益州）は晉に附けば則ち榮え、六郡の人は之に事えるは不便なりと。昔公孫述は蜀に在り、羈客（荊・王元・田戎・延岑は羈客、旅人）は事を用い、劉備の蜀に在るや、楚士（楚出身の龐統・魏延・馬良など）は多く貴し。吳（呉漢）、鄧（鄧艾）の西伐に及び、國を舉げて屠滅せられる。寧ぞ客主を分けんや！論者は安固之基に達せず、苟くも名位を惜しみ、以為らく劉氏の守令は方に州郡に仕えんと。曾て彼は乃ち國は亡び主易わるを知らず、豈に今日の（國を舉げて晉に報じるは）義舉にして、主榮え臣顯るるを同じくする哉！論者は又た謂うに臣は當に法正（劉備を蜀に案内した）と為るべし。臣は陛下の大恩を蒙り、臣が安んじる所を恣にす。榮祿（統、祿X）に至りて、漢、晉を問う無く、臣は皆な處らず、復た何為れぞ法正に倣わん乎！」

壽は書を省し内に慚じ、秘し而して宣せず。

成漢[李壽は李雄の子を皆殺しにす]九月，漢の僕射の任顔は反を謀り、誅せらる。顔は、任太后之弟也。漢主の壽は因りて盡く成主の雄の諸子を誅す。（壽は任太后が雄の正室なので、任顔の反を見て、甥を立てるのを恐れ

て虐殺した)

■ 「顔含は老を以て引退」 冬，十月，光祿勳の顔含は老を以て位を遜る。論者は以て、

「王導は帝之師傅なり，名位は隆く重く，百僚は宜しく為に降禮（拜す）すべし。」

太常の馮懷は以て含に問う。含は曰く、

「王公は貴重と雖も，理は偏敬（正しからざる敬）無し。降禮之言は，或は是れ諸君の事宜しきなり。鄙人は老いたり矣，時務を識らず。」

既に而して人に告げて曰く、

「吾は聞く、國を伐つは仁人に問わず（昔魯君が柳下惠に、斉を伐たんと聞いたときの答え）と，（6-092p）向に馮祖思（馮懷の字）は佞を我に問う，我は豈に邪徳有り乎！」

郭璞は嘗て含に遇い、之が為に筮せんと欲す。含は曰く、

「年は天に在り，位は人に在り。己を修め而して天は與えざる者は，命也。道を守り而して人知らざる者は，性也。自ら性命有り，著龜（ノコギリソウと亀甲、占いに用いる）を勞する無し。」

致仕して二十餘年，年九十三而して卒す。

【代の自立と段遼の帰属】

代 「什翼犍は立ち、屈と二分する」 代王の翳槐之弟の什翼犍は趙に質（94 卷咸和四年）となり，翳槐は疾病し，諸大人に命じて之を立たしむ。翳槐は卒し，諸大人の梁蓋等は以えらく、新たに大故（大喪）有り，什翼犍は遠くに在り，來たるは未だ必ず可からずと。其の至る比おい，恐らくは變亂有らんと。更めて君を立てんと謀る。而して翳槐の次弟の屈は，剛猛にして詐り多し。屈の弟の孤の仁厚なるに如かずと，乃ち相い與に屈を殺して而して孤を立てんとす。孤は可からず，自ら鄴に詣りて什翼犍を迎え，身ずから留まりて質と為るを請う。趙王の虎は義と而して俱に之を遣る。十一月，什翼犍は代王に繁峙（雁門郡の県、山西省雁門道繁峙県、現・忻州市繁峙県）の北に於いて即位し，改元して建國と曰い，國之半ばを分けて以て孤に與える。

代 「什翼犍は百官を置く」 初め，代王の猗盧は既に卒し（89 卷愍帝建興四年に見える），國は多く内難あり，部落は離散し，拓跋氏は寢く衰える。什翼犍の立つに及び，雄勇にして智略有り，能く祖業を修め，國人は之に付き，始めて百官を置き，衆務を分掌せしめる。代人の燕鳳を以て長史と為し，許謙を郎中令と為す。始めて反逆、殺人、奸盜之法を制し，號令は明白にして，政事は清簡なり，系訊（繫縛して尋問）連逮之煩い無く，百姓は之を安んじる。是に於いて東は濊貊より，西は破落那（旧ロシア領中央アジア）に及び，南は陰山に距り，北は沙漠に盡き，率ね皆な歸服し，衆數十萬人有り。

後趙 「段遼は趙と燕の間で帰属を悩む」 十二月，段遼は密雲山より遣使して迎えを趙に求める。既に而して中ば悔い，復た遣使して燕に迎えを求める。

後趙 「趙は麻秋を派遣して段遼を出迎え」 趙王の虎は征東將軍の麻秋を遣わして衆三萬を帥いて之を迎えしめ，秋に敕して曰く、

「降るを受けるは敵を受けるが如くせよ，輕々しくす可からざる也。」

尚書左丞の陽裕は，遼之故臣なるを以て，秋の司馬と為ら使む。

▲ 「慕容皝は自ら段遼を出迎え」 燕王の皝は自ら諸將軍を帥いて遼を迎え，遼は密かに燕と趙軍を覆えさんと謀る。皝は慕容恪を遣わして精騎七千を密雲山に伏せ，大いに麻秋を三藏口（京兆密雲県か）に敗り，死

者は什に六七なり。秋は歩走して免かるるを得、陽裕は燕の執る所と為る。

後趙 **〔鮮于亮は燕に降る〕** 趙の將軍の范陽の**鮮于亮**は馬を失い、歩いて山に縁いて進む能わず、因りて止まり、端坐す。燕兵は之を環り、叱して起た令めんとす。亮は曰く、

「身は是れ貴人なり、義は小人の屈する所と為らず。汝曹は能く殺さば ^{すみやか} 亟かに殺せ、能はずんば則ち去れ！」

亮の儀觀は豐偉にして、聲氣は雄厲なり、燕兵は之を憚り、敢えて殺さず、以て**眭**に白す。眭は馬を以て之を迎え、與に語り、大いに悦び、用いるに左常侍（晉の制、諸王国大国に左右常侍を置く）と為し、**崔毖**之女を以て之に妻す。

▲**眭**は盡く**段遼**之衆を得る。遼を待つに上賓之禮を以てし、**陽裕**を以て郎中令と為す。

後趙 趙王の**虎**は**麻秋**の敗れるを聞き、怒り、其の官爵を削る。(6-093p)

顯宗成皇帝中之下鹹康五年（己亥，339年）

■**春，正月**，辛丑（26日），大赦す。

■ **〔鄧岳は成漢の寧州を取る〕** **三月**，乙丑（元嘉曆四月21日），廣州刺史の**鄧岳**は兵を將いて漢の寧州（咸和八年に大成が占領を取り返す）を撃ち、漢の建寧太守の**孟彥**は其の刺史の**霍彪**（前卷咸和八年にあり）を執り以て降る。

■ **〔庾亮は中原回復体制、成漢を牽制〕** 征西將軍の**庾亮**は中原を開復せんと欲し、**桓宣**を表して都督沔北前鋒諸軍事、司州刺史と為し、襄陽に鎮ぜしむ。又た其の弟の臨川太守の**惔**を表して監梁、雍二州諸軍事、梁州刺史と為し、魏興に鎮ぜしむ。西陽太守の**翼**を南蠻校尉と為し、南郡太守を領し、江陵に鎮ぜしむ。皆な假節す。又た豫州を解きて、以て征虜將軍の**毛寶**に授けんと請う。詔して**寶**を以て揚州之江西諸軍事を監し、豫州刺史とし、西陽太守の**樊峻**と精兵萬人を帥いて ^{ちゅう} 邾城（江北、漢の江夏郡邾県、湖北省江漢道黃岡県西北十里、現・黃岡市黃州区）に戍せしむ。建威將軍の**陶稱**を以て南中郎將、江夏相と為し、沔中に入らしむ。**稱**は二百人を將いて（上流の武昌より）下りて**亮**を見る、**亮**は素より**稱**の輕々しく狡きを惡み、**稱**の前後の罪惡を數め、收めて而して之を斬る。後に魏興の險遠なるを以て、**庾惔**に命じて徙りて半洲（江州の東、江西省潯陽道九江県の西、元・九江市潯陽区）に屯ぜしむ。更に武昌太守の**陳囂** ^{ちんごう}を以て梁州刺史と為し、漢中に趣かしむ。參軍の**李松**を遣わして漢の巴郡、江陽を攻めしむ。**夏，四月**，漢の荊州刺史の**李閔**、巴郡太守の**黃植**を執りて建康に送る。漢主の**壽**は**李奔**を以て鎮東將軍と為し、**閔**に代わりて巴郡（成漢は荊州を置く）を守らしむ。

■ **〔庾亮は大挙して北伐を上疏〕** 庾亮は上疏して言う、

「蜀は甚だ弱く而るに胡は尚ほ強し、大衆十萬を帥いて移りて石城に鎮し、諸軍を遣わして江、沔に羅布して趙を伐つ之 ^{はかりごと} 規を為さんと欲す。」

帝は其の議を下す。丞相の**導**は之を許すを請う。大尉の**鑒**は議し、以て為す、

「資用は未だ備わず、大舉す可からず。」

■ **〔蔡謨の庾亮移鎮への反対議論〕** 太常の**蔡謨**は議し、以て為す、

「時に否泰（易の六十四卦、「否」は陰陽の氣塞く万物が生命力を失い、君臣隔絶し天下治まらず卦、「泰」は逆）有り、道に屈伸有り、苟しくも強弱を計らず而して輕々しく動けば、則ち亡びるに日を終えず、何の功か之れ有らん！今之計を為すには、威を養いて以て時を俟つに若くは莫し。時之可否は胡之強弱に系り、胡之強弱は**石虎** ^{かひ}之能否に系る。**石勒**が事を擧げるより、**虎**は常に爪牙と為り、百戰百勝、遂に中原は定まり、據る所之地は、

魏の世に同じくす。勒の死之後、虎は嗣君を挟みて、將相（石堪・程遐・徐光など）を誅す。内難は既に平らぎ、外寇を剪削し、一舉（咸和八年石虎は石聰を殺し金墉を抜き、石生を殺し、九年郭權を取るは前卷にあり）に而して金墉（洛陽の城）を抜き、再び戦い而して石生を擒とし、石聰を誅すること遣ちるを拾うが如く、郭權を取るのと槁れるを振るが如く、四境之内には、尺土も失わず。是を以て之を觀るに、虎は能く為さん乎、將たまた不能ならん也？論者は胡が前に襄陽（前卷咸康元年にあり）を攻めて抜く能わざるを以て、之を能く為す無しと謂う。夫れ百戰百勝之強きに而るに一城を抜かざるを以て劣ると為すは、譬えば諸を射撃するに百發百中して而るに一たび失すれば、(6-094p) 以て之を拙なきと謂う可き乎？」

「且つ石遇は、偏師也、桓平北（桓宣は平北將軍）は、邊將也、爭う所の者は疆場之士（続、士×）、利あれば則ち進み、否ならば則ち退き、急にする所に非ざる也。今征西（庾亮）は重鎮名賢を以て、自ら大軍を將い河南を席捲せんと欲し、虎は必ず自ら一國之衆を帥いて來たりて勝負を決す、豈に襄陽を以て比と為すを得る哉！今征西は之と戦わんと欲すは、石生に何如？若し城守せんと欲すれば、金墉は何如？沔水を阻まんと欲すれば、大江は何如？石虎を拒まんと欲すれば、蘇峻は何如？凡そ此の數者は、宜しく詳かに之を校るべし。

「石生は猛將にして、關中は精兵なり、征西之戦いは殆んど勝つ能わざる也。金墉は險固、劉曜の十萬の衆は抜く能わず、征西之守りは殆んど勝つ能わざる也。又た是の時に當たりて、洛陽、關中は皆な兵を擧げて虎を撃ち、今此の三鎮は反りて其の用を為す。之を前に方べれば、倍半之勢也。石生は其の半に敵う能わず、而して征西は其の倍に當たらんと欲す、愚の疑う所也。蘇峻之強きは石虎に及ばず、沔水之險は大江に及ばず。大江は蘇峻を御ぐ能わず、而るに沔水を以て石虎を御がんと欲す、又た疑う所也。昔祖士稚は譙に在り、城の北界に佃（耕作）す、胡は來たりて攻め、豫め軍屯を置き以て其の外を御ぐ。穀は將に熟さんとし、胡は果たして至り、丁夫は外に戦い、老弱は内に獲り、多く炬火を持ち、急なれば則ち穀を燒きて而して走る。此くの如く數年にして、竟に其の利を得ず。是の時に當たり、胡は唯だ河北に據り、之を今に方べれば、（石虎の支配領域は）四分之一耳。士稚は其の一を捍ぐ能わず、而るに征西は以て其の四を御がんと欲す、又た疑う所也。」

「然るに此れは但だ征西既に（中原に）至る之後を論じる耳、尚ほ未だ道路之慮（おもんばか）りを論ぜざる也。沔より以西は、水は急にして岸は高く、魚は溯流を貫き、首尾は百里。若し胡に宋襄之義（左伝に宋の襄公は列を撃たずの前例）無く、及ち我が未だ陣せず而して之を撃てば、將に之を若何せん？今王土と胡とは、水陸勢いを異にし、便習（南は船が便利で、北は馬を習う）同じからず。胡が若し死を送れば、則ち之に敵して餘り有り、若し江を棄てて遠く進めば、我が短なる所を以て彼が長なる所を撃つなり、懼らくは廟勝之算に非ざる也。」（2021-1128）

■朝議は多く謨と同じくす。乃ち亮に詔して移鎮を聽さず。

▲[燕は趙の遼西に侵攻] 燕の前軍師の慕容評、廣威將軍の慕容軍、折衝將軍の慕容根、蕩寇將軍の慕容泥は趙の遼西を襲い、俘獲は千餘家而して去る。趙の鎮遠將軍の石成、積弩將軍の呼延晃、建威將軍の張支等は之を追い、評等は與に戦い、晃、支の首を斬る。(6-095p)

▲[後趙][燕は段遼を誅殺、首を趙に送る] 段遼は燕に反かんと謀り、燕人は遼及び其の黨與の數十人を殺し、遼の首を趙に送る。

[代][首都制定よりも遊牧移動の利あり] 五月、代王の什翼犍は諸大人を參合陂（続は山西省雁門道陽高県とするが、内モンゴルのウランチャブ市涼城県に地名現存）に會し、灤源川（山西省雁門道代県、現・忻州市代県）に都せんと議す。

其の母の王氏は曰く、

「吾は先世より以來、遷徙（遊牧、水草を追う）を以て業と為す。今國家は多難にして、若し城郭に而して居れば、一旦寇來たれば、之を避ける所無し。」

乃ち止む。

代 **〔代は二大人で分割統治〕** 代人は它國之民の來たりて附く者を謂って皆な烏桓と為す、什翼犍は之を分けて二部と為し、各々大人を置きて以て之を監ぜしむ。弟の孤は其の北を監し、子の寔君は其の南を監す。

代 **▲〔代は燕と通婚〕** 什翼犍は昏（婚）を燕に求め、燕王の皝は其の妹を以て之に^{めあわ}妻す。

後趙 **秋，七月**，趙王の虎は太子の宣を以て大單于と為し、天子の旌旗を建てる。

【庾亮は逆に石虎に攻められる】

■ **〔開業の功臣の王導は薨ず〕** 庚申（１８日）、始興の文獻公の王導は薨じ、喪葬之禮は漢の博陸侯（霍光）及び安平の獻王（安平王孚）の故事に^{なぞら}視え、天子之禮を參用す。

■ **〔何充と庾冰の登用〕** 導は簡素にして慾寡く、善く事に因りて功を就す、日用之益（壮子に日に之を計れば足らず、歳にこれを計れば餘りあり）無しと雖も而も歳計は餘有り。三世（元帝・明帝・成帝）に輔相たりて、倉に儲穀無く、衣は帛を重ねず。初め、導は庾亮と共に丹楊尹の何充を帝に薦し、以て己の副と為さんと請い、且つ曰く、

「臣死する之日、願はくは充を引いて内に侍せしめれば、則ち社稷は^{うれ}虞い無し矣。」

是に由り吏部尚書を加える。導の薨ずるに及び、庾亮を徵して丞相、揚州刺史と為し、尚書事を録せしむ。亮は固辭す。辛酉（１９日）、充を以て護軍將軍と為し、亮の弟の會稽内史の冰を中書監、揚州刺史と為し、尚書事を參録せしむ。

■ **〔庾冰の政治は嚴刑緻密だが寬縱〕** 冰は既に重任に當たり、時務を経綸し、晝夜を捨てず、朝賢を賓禮し、後進を升擢し、是に由りて朝野は翕然として之を稱し、以て賢相と為す。初め、王導は政を輔け、毎に寬恕（広く思いやりある）に従う。冰は頗る威刑（刑法に嚴しい）に任ず、丹楊尹の殷融は之を諫める。冰は曰く、

「前相之賢すら、猶ほ其の弘に堪えず（寬弘に過ぎて任に堪えざる）、況んや吾が如き者を哉！」

范汪は冰に謂って曰く、

「頃ろ天文は度を^{このご}錯^{あやま}る（日月五星の運行の度合いが乱れる）、足下は宜しく消御之道を盡くすべし。」

冰は曰く、

「玄象（天象）は豈に吾の測る所なるや、正に當に勤めて人事を盡くす耳。」

又た戸口を隱實（事実を取り調べ）し、無名萬餘人を料出し、以て軍實に充てる。冰は好んで糾察を為し、繁細に近し、後には益々矯違（前の繁細を矯めて寬從に流れ愈々正道に違う）し、復た寬縱を存す、疏密は自由にして、律令は用いる無し矣。

■ **八月**，壬午（１０日）、復た（去年司徒を省いて丞相府に併せた）丞相を改めて司徒と為す。

■ **〔郗鑒は疾篤く蔡謨登用〕** 南昌の文成公の郗鑒は疾篤く、府事を以て長史の劉遐に付け、上疏して骸骨を乞い、且つ曰く、

「臣の統べる所は錯雜にして、^{おおむ}率ね北人多く、或は逼られて遷徙し（中原の人は土地に執着して南に渡らずも兵威

力に迫られて移すあり)、或は是れ新附し、百姓は土を懷しみ、(6-096p) 皆な本に歸るの之心有り。臣は國恩を宣べ、示すに好惡を以てし、田宅を處與し、漸く少安を得る。臣が疾篤きを聞けば、衆情は駭動し、若し當に北に渡れば、必ず寇の心を啟かん。太常臣の謨は、平簡貞正にして、素より望の歸する所、謂うに以て都督、徐州刺史と為す可し。」

詔して蔡謨を以て太尉軍司と為し、侍中を加える、辛酉(49日?), 鑒は薨じ、即ち謨を以て征北將軍、都督徐、兗、青三州諸軍事、徐州刺史と為し、假節す。

■ 【壽陽奪還計画の困難さ】 時に左衛將軍の陳光は趙を伐たんと請い、詔して光を遣わして壽陽(壽春、晉は簡文鄭太后の諱を避けて壽陽と呼ぶ、盟約が敗れて趙が支配)を攻めしむ。謨は上疏して曰く、

「壽陽の城は小さく而して固し。壽陽より琅邪(古の琅邪郡、趙は既に譙郡・彭城・下邳を取り壽春まで城が連なる)に至る、城壁は相い望み、一城攻め見れば、衆城は必らず救わん。又た、王師は路在ること五十餘日、前驅の未だ至らざるに、聲息(壽陽を攻めるという風聞)は久しく聞こえん、賊之郵驛は、一日に千里、河北之騎は、以て來たり赴くに足りん。夫れ白起(戰國策秦策にあり)、韓信、項籍之勇を以てしても、猶ほ梁を發き舟を焚き(項籍、船を湛めて鉅鹿を救う、8卷秦二世皇帝三年にあり)、背水(韓信の背水の陣は9卷漢高帝三年に見える)に而して陣す。今船を水渚に停め、兵を引いて城に造らんと欲す。前には堅敵に對し、顧みては歸路に臨む、此れ兵法之誡める所なり。若し進攻して未だ抜かず、胡騎が猝に至れば、懼らくは桓子(左伝にあり)が為す所を知らず而して舟中之指は掬すべきならん也。今光の將いる所は皆な殿中の精兵なり、宜しく向かう所征する有りて戦う無から令むべし。而るに之を堅城之下に頓め、國之爪士(爪牙の士)を以て寇之下邑を撃てば、之を得て則ち利薄く而して敵を損するに足らず、之を失えば則ち害は重く而して以て寇に益するに足る、懼らくは策之長なる者に非ざる也。」

乃ち止む。

■ 【陶侃は邾城を守るのは無理とす】 初め、陶侃は武昌に在り、議者は以て、「江北に邾城有り、宜しく兵を分けて之を戍らん。」

侃は毎に答えず、而して言う者は已まず。侃は乃ち水を渡りて獵し、將佐を引いて之に語りて曰く、

「我が險を設け而して寇を禦ぐの所以者、正に長江を以て耳。邾城は隔たりて江北に在り、内に倚る所無く、外は群夷(西陽の諸蠻に接す)に接す。夷中は利深く、晉人は利を貪り、夷は命に堪えず、必ず虜を引きて入寇す。(6-97p) 此れ乃ち禍いを致す之由にして、寇を禦ぐに非ざる也。且つ吳の時(吳は武昌に都して邾城に重兵を置く)に此の城を戍るには、三萬の兵を用いる、今は縦え兵の之を守る有るも、亦た江南に益無し。若し羯虜の乗ず可き之會有れば、此れ又た資する所に非ざる也。」

後趙 ■ 【石虎は大挙して邾城を攻める】 庾亮が武昌に鎮ずるに及びて、卒に毛寶、樊峻をして邾城に戍せ使む。趙王の虎は之を惡み、夔安を以て大都督と為し、石鑒、石閔、李農、張貉、李菟等の五將軍、兵五萬人を帥いて荊、揚の北鄙を寇し、二萬騎をして邾城を攻める。毛寶は庾亮に救いを求め、亮は城固きを以て、時に兵を遣わさず。

後趙 ■ 【石閔らは大いに晉を侵す】 九月、石閔は晉兵を沔陰(水の南を陰と為す、沔水の南)に敗り、將軍の蔡懷を殺す。夔安、李農は沔南(晉人は沔南に戍を置き、津要に備える)を陷とす。朱保は晉兵を白石(江蘇省金陵道江寧県の東北、現・南京市江寧区)に敗り、鄭豹等五將軍を殺す。張貉は邾城を陷とし、死者は六千人、毛寶、樊峻は圍みを突いて出で走り、江に赴き溺死す。夔安は進みて胡亭(安徽省淮泗道阜陽県、現・阜陽市潁州区)に據り、江夏を寇す。義陽將軍の黃沖、義陽太守の鄭進は皆な趙に降る。安は進みて石城(湖北省襄陽道鐘祥県、現・荊門市鍾祥市)を圍み、竟陵太守の李陽は拒ぎ戦い、之を破り、斬首は五千餘級、安は乃ち退く。遂に漢東を

掠め、七千餘戸を擁して幽、冀に遷す。

■ **〔庾亮は敗戦を謝罪〕** 是の時、**庾亮**は猶ほ上疏して遷りて石城に鎮するを欲すも、邾城の陥ちるを聞き、乃ち止む。上表して陳謝し、自ら三等を貶し、安西將軍を行う。詔有りて復位す。輔國將軍の**庾懌**を以て豫州刺史と為し、宣城、廬江、歷陽、安豐の四郡の諸軍事を監じ、節を假し、蕪湖に鎮ぜしむ。

後趙 **〔石虎は李巨を拔擢〕** 趙王の**虎**は貴戚の豪恣なるを患い、乃ち殿中御史（曹魏の制度、蘭台二御史を遣わして殿中の非法ヲ取り締まる）の**李巨**を擢（続は以）んで御史中丞と為し、特に親任を加え、中外は肅然とする。**虎**は曰く、

「朕は聞くに良臣は猛虎の如し、曠野を高歩し而して豺狼は路を避ける、信なるかな哉！」

後趙 **〔燕の悦綰は趙の李農の攻撃を凌ぐ〕** **虎**は撫軍將軍の**李農**を以て使持節、監遼西、北平諸軍事、征東將軍、營州（遼西・北平二郡を統べる）牧と為し、令支に鎮ぜしむ。**農**は衆三萬を帥いて征北大將軍の**張舉**と燕の凡城を攻める。燕王の**皝**は榑盧城大の**悦綰**を以て御難將軍と為し、兵一千を授け、凡城を守ら使む。趙兵の至るに及び、將吏は皆な恐れ、城を棄てて走らんと欲す。**綰**は曰く、

「命を受けて寇を禦ぐ、死生は之を以てす。且つ城に憑りて堅く守れば、一にして百に敵う可し、敢えて妄言して衆を惑わす者有れば斬る！」

衆は然る後に定まる。**綰**は身ずから士卒に先んじ、親ら矢石を冒す。**舉**等は之を攻之めること旬を経て、克つ能わず、乃ち退く。**虎**は遼西は燕境に迫り近く、數々攻襲に遭うを以て、乃ち悉く其の民を冀州之南に従す。

成漢 **〔成漢壽は病い、晉を奉ぜず〕** 漢主の**壽**は疾病となり、**羅恆**、**解思明**は復た晉を奉じるを議す。**壽**は従わず。**李演**は復た上書して之を言う。（6-098p）**壽**は怒り、**演**を殺す。

成漢 **壽**は常に**漢武**（漢の武帝）、**魏明**（魏の明帝）之人と為りを慕い、父兄の時の事を聞くを恥じる（胡三省曰く、書の無逸に言う「小人を見るに厥の父母は稼穡に勤勞せるに、その子は稼穡の艱難を知らず、乃ち逸し、乃ち諺し、既に誕し、否ざれば則ち厥の父母を侮りて曰う、昔の人は聞知する無し」とは**李壽**の言かと）、上書する者は先世の政教を言うを得ず、自ら以て為うに之に勝つ也。舍人の**杜襲**は詩十篇を作り、**應璩**（魏の文人）に託言して以て諷諫す。**壽**は報じて曰く、「詩を省て意を知る。若し今の人を作る所ならば、乃ち賢哲之話言（善言）なり。若し古の人の作る所ならば、則ち死鬼之常辭なる耳。」

▲■ **〔燕は東晉に趙の挾撃を請う、高句麗攻撃〕** 燕王の**皝**は自ら以て王を稱して未だ晉の命を受けず、**冬**、長史の**劉翔**、參軍の**鞠運**を遣わして來たりて（趙の）**捷**を獻じ功を論じ、且つ權假（自ら仮に王を稱する事）之間（続は意）を言い、並びに期を刻して大舉し、共に中原を平らげんと請う。**皝**は高句麗を撃ち、兵は新城（高句麗の西鄙で、西南は山に沿い、東北は南蘇・木底などの城に接す）に及び、高句麗王の**釗**（16代故国原王）は盟を乞い、乃ち還る。又た其の子の**恪**、**霸**（後の慕容垂）をして宇文の別部を撃た使む。**霸**は年は十三にして、勇は三軍に冠たり。

前涼 **張駿**は辟雍、明堂を立て以て禮を行う。**十一月**、世子の**重華**を以て涼州の事を行わしむ。

後趙 **十二月**、丁丑（7日）、趙の太保の**桃豹**は卒す。

■ 丙戌（16日）、驃騎將軍の琅邪の**王岳**を以て侍中、司徒と為す。

成漢 漢の**李奔**は巴東を寇し、守將の**勞楊**は敗死す。

顯宗成皇帝中之下鹹康六年（庚子，340年）

■ 「庾亮は薨じて庾翼が武昌を治める」 春，正月，庚子（1日）朔，都亭の文康侯の庾亮は薨ず。護軍將軍、錄尚書の何充を以て中書令と為す。庚戌（11日），南郡太守の庾翼を以て都督江、荆、司、雍、梁、益六州諸軍事、安西將軍、荊州刺史と為し，節を假し，亮に代わりて武昌に鎮ぜしむ。時の人は翼の年少く，其の兄を繼ぐ能わずを疑う。翼は心を悉くして治を為し，戎政嚴明にして，數年之間，公私は充實し，人は皆な其の才を稱す。

■ 辛亥（12日），左光祿大夫の陸玩を以て侍中、司空と為す。

宇文▲ 「慕容翰は宇文逸豆歸に疑われ、燕に逃げ帰る」 宇文の逸豆歸は慕容翰の才名を忌む。翰は乃ち陽りに狂いて酣飲し，或いは臥して自ら便利（大便小便垂れ流し）し，或いは發（髪）を被りて歌い呼び，拜跪して食を乞う。宇文は國を擧げて之を賤しみ，復た省錄（省察采録）せず，故を以て行來（往来）して自ら遂げるを得，山川の形便は，皆な之を默記（心中暗記）す。燕王の皝は以うに、翰の初め叛亂（前卷咸和八年）するに非ずを以て，猜嫌を以て出奔す。它國に在りと雖も，常に潜かに燕の計を為すと（牛尾谷の戦いの如し）。乃ち商人の王車を遣わして市を宇文部に通じ以て翰を窺わしむ。翰は車を見，言無し，膺を撫ちて之に頷き而して已む。皝は曰く、

「翰は來たらんと欲す也。」

復た車をして之を迎え使む。翰は弓の三石餘りを彎き，矢は尤も長大なり（6-099p），皝は之が為に手に可なる（手に便利、唯だ翰のみ用いる可なり）弓矢を造り，車をして道旁に埋め而して密かに之に告げ使む。二月，翰は逸豆歸の名馬を竊み，其の二子を攜えて過りて弓矢を取り，逃げ歸る。逸豆歸は驍騎百餘をして之を追わ使む。翰は曰く、

「吾は久しく客となり、歸らんとし、既に上馬を得たり，復た還る理無し。吾は向の日に陽りて愚かにみせて以て汝を誑かせり，吾之故藝は猶ほ在り，相い逼りて，自ら死を取るを為す無し了！」

追騎は之を輕んじ，直ちに突き而して前む。翰は曰く、

「吾は汝の國に居ること久しく恨恨（相恋する気持ち）たり，汝を殺さんと欲せず。汝は我を去ること百歩にして汝の刀を立てよ，吾は之を射て，一發にして中たる者ならば汝は還る可し，中たらざる者ならば來たりて前む可し。」

追騎は刀を解いて之を立てる，一發にして，正に其の環（鑲）に中てる，追騎は散走す。皝は翰の至るを聞き，大いに喜び，恩遇は甚だ厚し。

■ 庚辰（11日），星有り太微（星座の名、晉書天文志に曰く、太微は天子の庭なり、五帝の坐なり、十二諸侯の府なり）に孛す。

■ 三月，丁卯（29日），大赦す。

成漢 漢人は攻めて丹川（雲南省滇中道南寧県、現・曲靖市麒麟区）を抜き，守將の孟彥、劉齊、李秋は皆な死す。

代 代王の什翼犍は始めて雲中之盛樂（綏遠和林格爾県、現・フフホト市ホリングル県）宮に都す。

後趙 **成漢** 「趙の東晉挾撃提案を成漢は断る」 趙王の虎は漢主の壽に書を遣わし，之と與に兵を連らねて入寇し，約して江南を中分せんと欲す。壽は大いに喜び，散騎常侍の王嘏、中常侍の王廣を遣わして趙に使いせしむ。龔壯は諫めるも，聽かず。壽は大いに船艦を修し，兵を繕いて糧を聚める。秋，九月，尚書

令の馬當を以て六軍都督と為し、士卒七萬餘人を徵集して舟師と為し、大いに成都に於いて闘し、鼓噪して江（秦の時に蜀守李氷は二江を成都の中に穿ち、皆船を行う）に盈つ。壽は城に登りて之を觀、江南を吞噬する之志有り。解思明は諫めて曰く、

「我が國は小にして兵は弱く、吳は、會して險遠なり、之を圖るは未だ易からず。」

壽は乃ち群臣に命じて大いに利害を議せしむ。龔壯は曰く、

「陛下は胡と通じるは、晉と通じるに孰若や？胡は、豺狼也、既に晉を滅ぼせば、北面して之に事えざるを得ず。若し之と天下を争えば、則ち強弱は敵せず、危亡之勢い也、虞、虢之事（晉の獻公は道を虞に借り虢を伐つ、虢を伐った後に虞を伐つ）は、已然之戒なり、願はくは陛下は之を熟慮すべし。」

群臣は皆な壯の言を以て然りと為し、叩頭し泣いて諫め、壽は乃ち止む。士卒は咸な萬歳を稱す。

成漢 **龔壯は仮病で成都を去る** 龔壯は以為えらく人之行いは忠孝よりも大なるは莫し。既に父、叔之仇を報い（李壽の手を借りて李特の子孫を誅す事）、又た壽をして晉に事え使めんと欲するも、壽は従わず。乃ち詐りて耳は聾し、手は物を制せずと稱し、辭して歸り、文籍を以て自ら娛しみ、終身復た成都に至らず。(6-100p)

後趙 趙の尚書令の夔安は卒す。

後趙 **趙は総動員をかけて燕を伐つ準備** 趙王の虎は命じて司、冀、青、徐、幽、并、雍七州之民の五丁に三を取り、四丁に二を取り、鄴城の舊兵を合わせて、五十萬に滿たし、船を具すこと萬艘、河より海に通じ、穀千一百万斛を樂安城（山東省濟南道博興県、現・浜州市博興県）に運ぶ。遼西、北平、漁陽の萬餘戸を充、豫、雍、洛（石虎は司州を鄴に置き、晉の司州を洛州とす）の四州之地に徙す。幽州より以東の白狼（熱河塔溝県の南、現・朝陽市凌源市）に至るまで、大いに屯田を興こす。悉く民馬を括取し、敢えて私匿する者有れば腰斬し、凡そ四萬餘匹を得る。大いに宛陽（河南省河北道臨漳県の西に趙王の閑馬台あり、現・邯鄲市臨漳県）に闘し、以て燕を撃たんと欲す。

▲**後趙** **燕は迎撃して薊城を襲う** 燕王の皝は諸將に謂って曰く、

「石虎は自ら樂安城を防守重複するを以て、薊城の南北は必ず備えを設けず、今若し詭路より其の不意に出れば、盡く破る可き也。」

冬、十月、皝は諸軍を帥いて蠡螘塞（京兆昌平県、現・北京市昌平区）より入り趙の戍將を襲い、道に當たる者は皆な之を禽とし、直ちに薊城に抵る。趙の幽州刺史の石光は兵數萬を擁して、城を閉じて敢えて出でず。燕兵は進みて武遂の津（直隸省保定道武強県、現・衡水市武強県）を破り、高陽に入り、至る所積聚を焚燒し、三萬餘家を略し而して去る。石光は懦弱に坐し征せられて還る。

後趙 **太子を政治参与の是非** 趙王の虎は秦公の韜を以て太尉と為し、太子の宣と迭日（隔日に交代で）に尚書の奏事を省可し、賞刑を専決し、復た啟白せざらしむ。司徒の申鍾は諫めて曰く、

「賞刑者、人君之大柄にして、以て人に假す可からず。微を防ぎ漸を杜ぎ、逆亂を未然に消す所以也。太子の職は膳を視るに在り、當に政に豫かるべからず。庶人遂（前卷咸康三年）は政に豫るを以て敗を致す、覆車は未だ遠からざる也。且つ政を二にし權を分けるは、禍いを階せざることを鮮なし。之を愛するに道を以てせざるは、適に之を害する所以也。」

虎は聽かず。

後趙 **宦官の申扁が生殺与奪權を持つ** 中謁者令（宦官）の申扁は慧悟（利發）辯給を以て虎に寵有り、宣

は亦た之にしたし瞞み、機密をつかさど典ら使む。虎は既に事を省せず、而して宣、韜は皆な酣飲、畋獵を好む。是に由りて除拜、生殺は皆な扁おおむが決し、九卿より已下は率ね皆な塵を望み而して拜す。

■**崔約は太子の貌深きを擲擄して誅殺**太子詹事の孫珍は目を病み、方を侍中の崔約に求め、約は之に戯れて曰く、

「中にによう溺（尿、いばり）すれば則ち愈えん」。

珍は曰く、

「目は何ぞ溺する可きや？」

約は曰く、

「卿の目は眈眈（目深き貌）なり、正に中に溺するに耐えたり。」

珍は之を恨み、以て宣に白す。宣は兄弟の中に于いて最も胡狀にして、目深く、之を聞きて怒り、約の父子を誅す。是に於いて公卿以下は珍を畏れて目をそばだ側つ。

後趙 **燕公の斌を免官鞭打ち** 燕公の斌は邊州を督し、亦た畋獵を好み、常に管（城門の管輪）を懸け而して入る。征北將軍の張賀度は毎に之を裁諫し、斌は怒り、賀度を辱かしむ。虎は之を聞き、主書（東漢以来、尚書の諸曹にあり）の禮儀をして節を持して之を監ぜ使む。斌は儀を殺さんとし、又た賀度を殺さんと欲す、賀度は嚴衛し馳せて之を白す。虎は尚書の張離を遣わして騎を帥いて斌を追ひ、之に鞭つこと三百、免官して第に歸らしめ、其の親信十餘人を誅す。（6-101p）

後趙 **前涼** **前涼の使者無礼、二方面作戦回避して斬らず** 張駿は別駕の馬詵を遣わして趙に入貢し、表辭は蹇傲（堅く傲慢）なり。趙王の虎は怒り、詵を斬らんと欲す。侍中の石璞は諫めて曰く、

「今國家の當に先に除くべき所の者は、遺晉也。河西は僻陋にして、意と為すに足らず。今馬詵を斬れば、必ず張峻を征せん、則ち兵力は分け而して二と為り、建康は復た數年之命を延べん矣。」

乃ち止む。璞は、苞（晉の文帝・武帝に事える）之曾孫也。

成漢 **後趙** **漢の李閔の帰還の波紋** 初め、漢の將のりこう李閔は晉の獲る所と為り、逃げて趙に奔り、漢主の壽は書を趙王の虎に致して以て之を請い、署して曰く、

「趙王石君」。

虎は悦ばず、外に付して之を議せしむ。中書監の王波は曰く、

「今李閔（前年晉の捕虜となる）は死を以て自ら誓いて曰く、『苟しくも骨を蜀に歸すことを得れば、當に宗族を糾帥して、王化に混同すべし。』若し其の信なる也、則ち一旅（旅団、五百人）を煩わさず、坐して梁、益を定めん。若し前卻有りともし、一の亡命之人を失うに過ぎず、趙に於いて何ぞ損せんや！李壽は既に大號を僭し、今制詔を以て之に與えれば、彼は必ず酬返（復書）せん、復た書を為りて之に與えるに若かず。」會々挹婁國（ツングース系蕭慎、奉天省の東北・吉林黒竜江、奉天鐵嶺県の東南 60 里に故城、鉄嶺市鉄嶺県）は楛矢（木の弓矢）石弩（石鏃）を趙に獻ず、波は因りて以て漢に遣らんと請い、曰く、

「其の我が能く遠方を服するを知ら使めん也。」

虎は之に従い、李閔を遣りて歸らしめ、厚く之が禮を為す。閔は成都に至り、壽は下詔して曰く、

「羯使は來庭し、其の楛矢を貢ぐ。」

虎は之を聞き、怒り、王波をおとし黜めて、白衣を以て職を領せしむ。

顯宗成皇帝中之下鹹康七年（辛丑，341年）

▲**春、正月**，燕王の**皝**は唐國（慕容廆は唐國郡を置く）内史の**陽裕**等をして柳城之北、龍山之西に築城せしめ、宗廟、宮闕を立て、命じて龍城（柳城を改名、熱河省朝陽県、現・遼寧省朝陽市）と曰わしむ。

■**二月**，甲子（1日）朔，日食之れ有り。

【慕容皝に大將軍号、劉翔は交渉に成功】

■ 「燕の劉翔は建康に使いす」 劉翔は建康に至り，帝は引見し，慕容鎮軍の平安を問う。對えて曰く、「臣が遣を受ける之日，朝服して章を拜す（朝服して南に向かい拜して章表を庭より發す）。」

■ 「劉翔は慕容皝に大將軍号を求める」 翔は燕王の皝の為に大將軍、燕王の章璽（印璽）を求める。朝議して以て為す、

「故事には、大將軍は邊に處らずと。漢、魏より以來，異姓を封じて王と為さず。求むる所は許す可からず。」

翔は曰く、

「劉、石の亂を構えるより，長江以北は，剪（等しく）して戎藪（蠻民の巢窟）と為り，未だ中華の公卿之胄の一人能く臂を攘い戈を揮い、凶逆を摧破する者有るを聞かざる也。獨り慕容鎮軍父子は力を竭して，心は本朝に存し，寡を以て衆を撃ち，屢々強敵を殄くし，石虎をして畏懼し，悉く邊陲（遼西）之民を徙して三魏（魏郡・陽平・廣平）に散居し，國を蹙めること千里，（6-102p）薊城を以て北境と為さしむ。功烈此くの如し，而るに海北之地を惜しんで以て封邑と為さざるは，何を哉！昔漢の高祖は王爵を韓（韓信）、彭（彭越）に愛しらず，故に能く其の帝業を成す。項羽は刎印を授けるに忍びず，卒に用って危亡せり。吾之至心は，苟くも其の事える所を尊ばんと欲するに非ず，竊に聖朝の忠義之國を疏んじ，四海をして勸慕する所無から使むるを惜しむ耳。」

■ 「劉翔は建康に留まり交渉す」 尚書の諸葛恢は，翔之姉の夫也，獨り異議に主たり，以て為す、

「夷狄の相い攻めるは，中國之利なり。惟だ器と名は，輕々しく許す可からず。」

乃ち翔に謂って曰く、

「借りに慕容鎮軍をして能く石虎を除か使めば，乃ち是れ復た一りの石虎を得る也，朝廷は何ぞ焉に頼らん！」

翔は曰く、

「嫪毐（左傳に鄭の子太叔は范獻子を見て曰く、嫪緯を恤えずして宗周の隕ちるを憂う。王室の寧からざるは晉の恥なり）すら猶ほ宗周之隕を恤うるを知る。今晉室は阼危（危うく墜ちようとする）す，君の位は元、豈に倖しく，曾ち憂國之心無き邪？向に靡、鬲之功（左傳に、夏の方に衰えるや后羿は夏の民に因りて以て夏の政を代える。其の臣の寒浞は羿を殺して夏の后相を滅ぼす。后緡は逃げて有仍に歸り少康を生む。靡は有鬲氏に奔り有鬲より衆を収めて以て浞を滅ぼし、少康を立てて夏を祀りて天に配し舊物を失わず）をして立たざら使めば，則ち少康は何を以てか夏を祀らん！桓、文之戦い（齊の桓公は北の山戎、南の楚を伐ち、晉の文公は楚に克ち、諸侯を率いて内は周室を奉じ外は夷狄を払い中國を安んじる。論語に管仲無かりせば吾被髮左衽せん。管仲は桓公の謀臣）捷たざれば，則ち周人は皆な左衽（左前、夷狄）と為らん矣。慕容鎮軍は戈を枕として旦を待ち，志は凶逆を殄さんとす，而るに君は更に邪惑之言を唱え，忠臣を忌み問す。四海の未だ壹にならざる所以は，良に君が輩に由る耳！」

翔は建康に留まること歳餘，衆議は終に決せず。

■ 「劉翔は遂に慕容皝の大將軍号を勝ち取る」 翔は乃ち中常侍の彧弘を説いて曰く、

「石虎は八州之地を苞ね，帶甲は百萬，志は江、漢を呑み，索頭、宇文より諸々の小國に暨ぶまで，臣服

せざる無し。惟だ慕容鎮軍は天子を翼戴し、精は白日を貫く、而るに更に殊禮之命を獲ず、竊かに恐れるは天下は心移して解體し、復た南に向う者無し矣。公孫淵は呉に尺寸之益も無し（72 卷魏明帝青龍元年のあり）、呉主は封じて燕王と為し、加えるに九錫を以てす。今慕容鎮軍は屢々賊鋒を摧き、威は秦、隴に振い、虎は比ごろ重使を遣わし、甘言厚幣して、授けるに曜威大將軍、遼西王を以てせんと欲する（この部分は劉翔のはったり）。慕容鎮軍は其の正に非ざるを惡み、卻け而して受けず。今朝廷は乃ち虚名を矜惜（哀れみ惜しむ）し、忠順を沮抑し、豈に社稷之長計ならん乎！後に之を悔いると雖も、恐らくは及ぶ無からん已。」弘は之が為に入りて帝に言い、帝の意は亦た之を許さんと欲す。會々^{たまたま}鮑は上表して稱す、
「庾氏兄弟は權を擅^{ほしいまま}にして亂を召く、宜しく斥退を加え、以て社稷を安んじるべし。」

又た庾冰に書を與え、其の國に當りて權を秉り、國の為に雪恥する能わざるを責める。冰は甚だ懼れ、其の絶遠にして、能く制する所に非ざるを以て、乃ち何充と其の請いに従わんと奏す。乙卯（?）、慕容鮑を以て使持節、大將軍、都督河北諸軍事、幽州牧、大單于、燕王（6-103p）と為し、備物、典策（先に備物有りて之に典策を加える）は、皆な殊禮に従う。又た其の世子の雋を以て假節、安北將軍、東夷校尉、左賢王と為す。軍資器械を賜わること以て千萬計りなり。又た諸々の功臣百餘人を封じる。劉翔を以て代郡太守と為し、臨泉郷侯に封じ、員外散騎常侍を加える。翔は固く辭して受けず。

■ 〔劉翔は江南の驕奢酣縱を非難〕翔は江南の士大夫の驕奢酣縱して相い尚^{たつと}ぶを疾み、嘗て朝貴の宴集するに因りて、何充等に謂って曰く、

「四海は板蕩（天下が乱れる）し、奄^{たちま}ち三紀（惠帝の永興元年の劉淵の乱より 36 年）を逾え、宗社は墟と為り、黎民は塗炭（の苦しみ）す、斯れ乃ち廟堂は慮りを焦がす之時、忠臣は命を畢わる之秋也。而るに諸君は江沱（江の支流）に宴し安んじ、情を肆^{ほしいまま}にし欲を縱^{ほしいまま}にし、奢靡（身の程を過ぎた贅沢）を以て榮と為し、傲誕（生れつき剛直）を以て賢と為す。讐^{けんがく}諂^{あがまつ}（ありのまま）之言を聞かず、征伐之功は立たず、將に何を以て主を尊び民を濟^{すく}わん乎！」

充等は甚だ慚じる。

■ 〔劉翔は帰還に際し、晉に成漢に専念するを進言〕詔して兼大鴻臚の郭焮を遣わして節を持して棘城に詣りて燕王に冊命せしめ、翔等と偕に北せしむ。公卿は江上に餞し、翔は諸公に謂って曰く、

「昔（夏の）少康は一旅に資り以て有窮（夏の時代の氏族）を滅ぼし、（越王）勾踐は會稽に憑りて以て強呉に報いる。蔓草は猶ほ宜しく早く除くべし、況んや寇仇を乎！今石虎、李壽は、志は相い吞噬^{どんぜい}せんとす、王師は縦え未だ能く北方を澄清せずとも、且^{しばら}く當に巴、蜀に従事すべし。一旦石虎が人に先だちて事を舉げれば、壽を并せて而して之を有し、形便之地に據りて以て東南に臨み、智者有りと雖も、其の後を善くする能わず矣。」

中護軍の謝廣は曰く、

「是れ吾が心也！」

■ 三月，戊戌（5日），皇后の杜氏は崩す。夏，四月，丁卯（5日），恭皇后を興平陵に葬す。

■ 〔東晉は白籍を立てて人口把握〕詔して王公以下庶人に至るまで實し、皆な土斷（檢地）、白籍（本来の戸籍の黄籍に対し、江南への流民の故郷と同名の県・郡・州を僑立）を正す。

▲ 〔慕容鮑の大將軍体制〕秋，七月，郭焮、劉翔等は燕に至り、燕王の鮑は翔を以て東夷護軍と為し、大將軍の長史を領ぜしめ、唐國內史の陽裕を以て左司馬と為し、典書令（晉制では王国に典書・典祠・典衛・學官令各々一人を置く。典書令は天朝の吏部尚書の職。中朝では常侍侍郎の上、江左では常時に次三軍の下）の李洪を右司馬と為し、中

尉の鄭林を軍諮祭灑と為す。

■八月，辛酉（1日），東海哀王の沖（東海王越の後継になるは87巻懷帝永嘉五年にあり）は薨ず。

代九月，代王の什翼犍は盛樂城を故城南八里に築く。

代代王の妃の慕容氏は卒す。

代〔匈奴務桓は什翼犍と趙に修好〕冬，十月，匈奴の劉虎は代の西部を寇し，代王の什翼犍は軍を遣わして逆え撃ち，大いに之を破る。虎は卒し，子の務桓^{ぼつかん}は立つ，遣使して代に和を求め，什翼犍は女を以て之に妻す。務桓は又た趙に朝貢し，趙は務桓を以て平北將軍、左賢王と為す。

後趙〔趙は海路で燕の安平を襲う〕趙の横海將軍の王華は舟師を帥いて海道より燕の安平（遼東の西安平、現・丹東市元宝区）を襲い，之を破る。

▲〔慕容恪を平郭に鎮ぜしむ、高句麗牽制〕燕王の皝は慕容恪を以て渡遼將軍と為し，平郭に鎮ぜしむ。慕容翰、慕容仁より之後，（6-104p）諸將能く繼ぐ者無し。恪の平郭に至るに及び，舊を撫し新を懷け，屢々高句麗の兵を破り，高句麗は之を畏れ，敢えて境に入らず。

■十二月，興平の康伯の陸玩は薨ず。

成漢〔李壽は石虎を慕い、圧政を行う〕漢主の壽は其の太子の勢を以て大將軍を領し、尚書事を録せしむ。初め，成主の雄は儉約寛惠を以て蜀の人心を得る。李閔、王嘏が鄴より還るに及び，盛んに鄴中の繁庶，宮殿の壯麗を稱す、且つ言う

「趙王の虎は刑殺を以て下を御す，故に能く境内を控制す。」

壽は之を慕い，旁郡の民三丁以上の者を徙して以て成都を實し，大いに宮室を修め，器玩を治める。人に小過有れば，輒ち殺して以て威を立てる。左僕射の蔡興、右僕射の李嶷は皆な直諫に坐して死す。民は賦役に疲れ，吁嗟^{うさ}は道に滿ち，亂を思ふ者衆^{おお}し矣。

令和3年3月26日 翻訳開始 11523 文字
令和3年4月3日 翻訳終了 23771 文字
令和3年11月30日 書下し終了 24561 文字